

# 21 ラナンキュラスの生産拡大を目指して

## ■ ラナンキュラス研究会ほか ■

(農業経営課 村口 浩)

### ●対象の概要

香川県におけるラナンキュラスの切り花栽培は、昭和末期、県東部のさぬき市（旧大川郡長尾町、寒川町）から始まった。平成18年には、ウイルス病の蔓延などで栽培面積は0.5haにまで減少したが、香川県農業試験場による茎頂培養技術の開発、「てまり」シリーズの育成が起爆剤となり、平成19年以降、県西部の三豊市にも拡大した。現在、栽培は県下全域に広がり、約1.5ha（平成25年）まで拡大している。

### ●課題を取り上げた理由

香川県のラナンキュラス栽培は、香川県農業試験場が茎頂培養による増殖技術を開発し、ウイルスフリー球根としてJAに優良種苗を供給している。比較的収益性が高く、低コストな品目として、作付推進が図られ、既存産地以外にも面積が増えて来ている。

しかし、栽培経験が浅いことに加え、生理・生態を踏まえた栽培方法が不明な部分もあり、気象条件などによって品質や収量が不安定であるのが現状である。また、ラナンキュラスは全国的にも産地が増えてきており、他産地との差別化による優位販売を行う上で、県オリジナル品種の育成やブランド化に向けた販売支援も求められている。

これらのことから、安定生産技術の確立や生産性向上のための栽培技術を開発するとともに、県オリジナル品種の育成・普及による収益性の向上を図り、県全体の生産拡大につなげる必要があり、普及・研究・行政が一体となって栽培技術の改善に向けた検討を行い、JA、生産者と協力して、生産拡大に向けた活動を行った。

### ●普及活動の経過

#### 1 普及・研究・行政・民間の連携

香川県では、現場で生じた技術的な問題を解決しその成果を迅速に普及するために、普及・研究・行政連絡会議を設置しており、その中で花き部会では、県オリジナル品種「てまり」シリーズを核として、技術開発・販売促進の両面

から、ラナンキュラスの生産拡大に向けた検討を行っている。さらに、ラナンキュラス生産者とJA、香川県で構成されるラナンキュラス研究会などを通じて、栽培技術の向上に向けた検討を行っている。

#### 2 新品種の普及に向けた展示ほの設置

現在、「てまり」シリーズは、県育成品種5品種、現地選抜系統5品種の計10品種が産地で栽培されている。県育成「てまり」シリーズは、従来の品種に比べ豊産性であることが売りであり、生産拡大に向けて有効な品種であるが、栽培特性について、不明な点も多いことから、農業試験場と普及センターの連携により、各産地で栽培特性解明に向けた展示ほを設置した。

#### 3 新規生産者を対象とした講習会の開催

平成23～24年度にかけて「小春てまり」、「ゆずてまり」、「れもんてまり」、「藤てまり」と4品種続けて登録出願となったことを契機に、県、JAが協力して推進を行った結果、平成25年度には4戸、平成26年度には9戸の新規栽培者があり、現在34戸に増加した（表1）。

表1 各普及センター管内の新規生産者の推移（戸）

	東讃	小豆	中讃	西讃	合計
25年	2	2	0	0	4
26年	4	2	3	0	9
全生産者数(26年)	14	4	3	13	34

しかし、ラナンキュラス栽培は難しい技術も多く、その一つが早出しに向けた催芽処理であり、定植時期とともに高値が期待できる年内出荷本数に大きく影響する。



写真1 技術講習会の開催状況

そこで、新規生産者を対象に技術講習会を開催し、農業試験場の協力の下、実演も踏まえて催芽処理方法について指導を行うとともに適正な定植時期の励行を呼び掛けた(写真1)。また、各生産者の催芽処理の実施状況について、普及センター、試験場、JAとともに現地巡回し、その状況を確認しながら、培土の水分、冷蔵庫の温度管理などについて指導を行った。

#### 4 収穫支援資料の作成

従来、ラナンキュラス切り花は蕾での出荷が基本であった。しかし、近年、ほ場で開花させ十分に花卉が伸長した状態の大輪で出荷する産地が増えてきており、古くからの産地であり蕾出荷を行っていた香川県内の産地でも、切り前を検討する必要性に迫られた。そこで、生産者の収穫時の目安となるように、各品種ごとに切り前の基準表を作成した(写真2)。

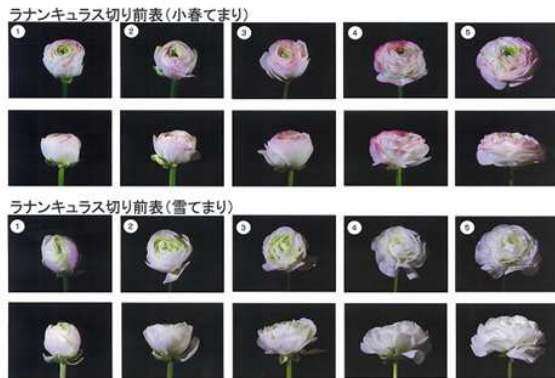


写真2 作成した切り前基準表

#### 5 出荷形態の検討

香川県のラナンキュラスはさぬき市と三豊市で主に栽培されているが、それぞれの産地によって、縦箱・横箱、湿式・乾式など、出荷形態が大きく違う。25年度から新規生産者が増加し、産地も県内各地に広がり、26年度は市場への出荷も増えることから、「てまり」シリーズの切り花品質の統一と知名度の向上を図るために、出荷形態の検討を行った。

### ●普及活動の成果

#### 1 年内出荷本数の増加

ラナンキュラスは定植直後の気温によって高温障害を受けやすいことから、新規生産者を対象に開催した講習会や各産地における講習会などで、高温障害を受けにくいと考えられる10月に入ってから定植するように徹底して指導を行った。本年は9月以降順調に気温が下がったことから、25年度に発生したような定植後の高温障害は発生せず、その成果は確認できなかったものの、従来産地では年内出荷本数は大幅に向上した。また、新規生産者についても、講習会および現地での適期指導の成果によって、ベテランでも多い冷蔵庫内での催芽処理中のミスもほとんどなく、従来産地と同様、年内から出荷を行うことができた。

2 栽培技術の向上と出荷切り前の統一

ラナンキュラス産地を拡大する上で一番の課題は、球根の供給体制の確立である。そのため、試験場と普及センターが連携して現地試験を行い、効率的な球根の養成・増殖方法、球根の大きさに見合った管理方法などについて検討を行い、一定の方向性を見出すことができた。また、催芽処理講習会同様、新規生産者を中心に講習会を行い、購入した球根を長持ちさせるとともに、次期作に向けて充実した球根を養成する方法などについて指導を行った。講習会には次年度の栽培希望者も数名の参加があり、ラナンキュラスに対する農家の関心は高いことが伺われ、生産拡大に向けた礎となった。

作成した切り前の基準表は、口頭では説明しにくい収穫適期の指導において、生産者と指導員の確認ツールとして、また、産地の目ならし用の資料として活用しており、新規生産者だけでなく、従来からの生産者や指導員にも有効なツールとなっている。

#### 3 市場へのPR活動

出荷形態の検討については、関西、関東の主要市場の協力により日持ち試験も併用して行い、一定の方向性が得られた。また、日持ち試験の結果も活用してPR活動を行った結果、関東市場への足掛かりもでき、産地も活気づいている。

### ●今後の普及活動の課題

以上の活動によって、26年度は生産者数、栽培面積ともに大幅に増加し、今後も新規生産者は増加する見込みである。しかし、栽培上の問題点もまだ多く、さらには、球根の供給も生産者の希望に100%応えられないのが現状である。今後、新規生産者が増加することによって切り花品質のばらつきも考えられることから、生産者の栽培技術の高位平準化を目指すとともに、優良な球根の供給体制の規模拡大に向けて、農業試験場、普及センター、JAが協力して取り組んでいきたい。